

保育者の初期職場適応について

白 佐 俊 憲

一 はじめに

保育者がよい適応状態にあるということは大切な要件である。もし保育者がよい適応状態にあれば、望ましい保育活動が可能となり、幼児によい影響を及ぼすことが期待できるが、不適応の状態にあるとすれば、そのようなことはあまり期待できないからである。したがって、保育者が職場でよい適応状態にあるかどうかは重要な問題であるといえよう。

それでは、現実には保育者はよい適応状態にあるのであろうか。残念ながら悲観的な見方をせざるを得ないのが実状だと思う。諸調査を引用するまでもなく、多くの保育者は、安い給料、きつい労働条件、低い社会的評価などに悩み、不満をもちながら

働いているからである。幼稚園・保育所の増加が著しい今日、真の幼児教育の充実発展のためには、この保育者の適応問題の解決、改善が重要な課題であると考えられる。

さて筆者は、保育者の適応問題に強い関心をもち、昭和四十三年保育者養成校入学者を対象に、同一対象者を多面的・追跡的に検討していく研究を試みているが、その一環として就職後まもない時点での職場適応状況を調査したので、おもな結果をここに紹介しておきたいと思う。

本調査は、対象者のうち就職した者に対して、質問紙法（郵送法）によって四十五年七月八月に実施したものである。回収率は、全体では五七%であったが、幼稚園教諭では六一%、保育所保育母では六四%であった。この報告は、夜間養成校卒業者

で在学中の職場にとどまった者を除く幼稚園教諭七〇名、保育所保母五九名の回答を整理したものである。

なお、結果の解釈にあたっては、対象者の構成が問題となるが、経営の主体についてのみ示すと、公立勤務者は幼稚園教諭群では三%（公立就職者は全員回答している）、保育所保母群では七三%となっている。この点を考慮する必要がある。

二 希望・予想との一致度

最初に、現在の職場が、彼女らがこんなところに勤めたいと思っていた「希望」、および彼女らが就職を決めた時こんなところであろうと思った「予想」とどの程度一致していたか、この点について調べた結果を紹介する。

希望・予想との一致度は、職場に関する事項を職務内容、勤務状態、待遇、職場環境に大別し、それぞれについて「非常に一致している」から「全く一致していない」までの四つの一致度を表わす言葉から、自分に最もあてはまるものを選んで回答してもらった。

結果の詳細を報告する余裕はないので、簡略化して示す。表1は「非常に一致している」と「かなり一致している」と答えたい者を合わせ、その群全体における割合を示したものである。

「希望との一致」では、全体的に一致度は高くなく、五〇%

表1 「一致している」と答えた者の割合

領 域		幼稚園教諭 (N=70)	保育所保母 (N=59)
希望との一致	内容状態	57.9%	32.2%
	職務	52.9	62.7
	待遇	33.3	57.6
	職場環境	56.5	50.9
予想との一致	内容状態	65.2	51.8
	職務	63.7	67.8
	待遇	71.0	66.6
	職場環境	60.8	57.1

六〇%にとどまっている。保育所保母の職務内容（保育の実際）と幼稚園教諭の待遇（給料など）の一致度がとくに低い。

「予想との一致」では、すべての領域で希望との一致を上まわった一致度となっている。このことは、彼女らが実際に就職先を決めるに当たって、希望条件あるいは要求水準を下げることを意味すると思われるが、希望との一致度が最も低かった幼稚園教諭の待遇が予想との一致では最も一致度が高くなっている。

るのは興味深い結果である。私立幼稚園教諭の給料の低さは周知のことであるが、希望とは一致しないのに予想と一致するのは実に皮肉なことである。公立幼稚園が少ないうえに、幼稚園教諭を希望する者にとっては、待遇面でのあきらめができてはじめて、やりたい仕事にすることができるのである。

職場の実態については、講義や実習でかなり知っているはずの彼女らではあるが、勤務して日時が経過するとやはり予想し得なかったいろいろな問題が出てくるようである。予想との一致で一致していないと答えた者に対して、その不一致な点の内容を書いてもらったのであるが、予想よりよかったという内容のものはごくわずかで、ほとんどが失望を意味する内容のものであった。

希望や予想との一致度がこのようになっていいることを承知した上で、職場の適応の問題をみていきたいと思う。

三 職場に対する満足度

初任保育者の職場適応を調べる方法として、まず、現在の職場に対する満足感を尋ねてみた

これは前の「希望・予想との一致度」との関連をみることもあって、職場に関する事項の領域を「職務内容」「勤務状態」「待遇」「職場環境」に大別し、「非常に満足している」から

「全く不満である」までの四つの満足度を表わす言葉を示し、この中から現在の自分にあてはまるものを選んで回答してもらうようにした。

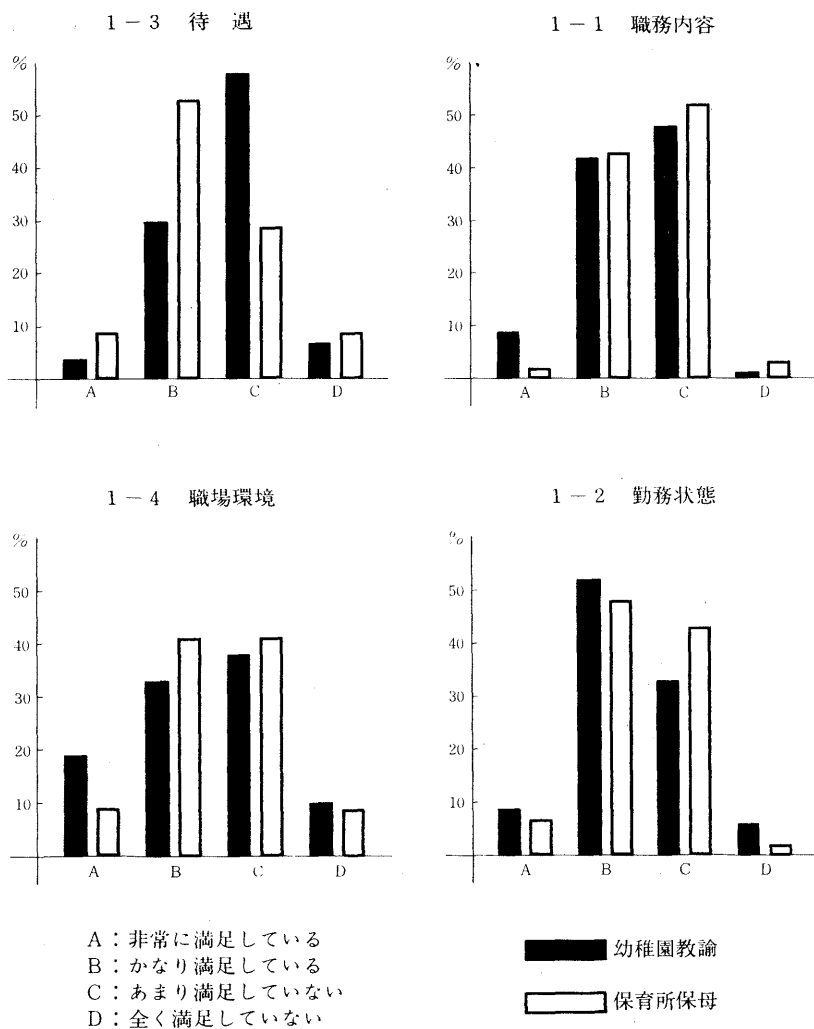
第一の「職務内容」とは保育の実際のことであるが、図1-1で明らかかなように、幼稚園教諭では満足している方と満足していない方がやや多くなっている。保育所保育では、満足していない方がやや多い結果となっている。しかし、両群の分布の間には統計的に有意な差はない。

満足していない者に不満な点を記入してもらったので主なものをあげると、最も多いのは、仕事の内容が本来の職務以外のものが多過ぎるといふもので、事務や掃除に多くの時間がとられ、保育活動に専念できないと訴えている。また、経験主義に陥って進歩がみられないとか、保育に計画性がなく、その日、その場限りの保育になっているという園全体の運営面に対する不満も少なくない。

第二の「勤務状態」は文字通り勤務時間などの状況についてであるが、両群とも満足している方の者が若干多い結果になっており、幼稚園教諭の方が満足率がやや高い。(図1-2) 両群の間に有意差は認められない。

満足できない点のおもなものとしては、肉体労働であるので疲労が激しい、雑務が多く勤務時間内に仕事が終わらない、勤

図1 現在の職場に対する満足度



務時間と休憩時間との区別がはっきりしない、昼食を落ち着いてとれない、出勤時間が不規則だからだの調子が整わない、受持の子どもの数が多く全体の掌握がむずかしいなどがあげられている。勤務がきついという訴えがとくに多い。

第三には給料などの「待遇」について満足度を調べた。図1—3に示したように、両群で対照的な満足度となっている。幼稚園教諭で満足していない方の者が多くなっているのに対して、保育所保母では満足している方の者が多くなっている。統計的には1%水準で両群の満足度の間に有意な差が認められる。

幼稚園教諭の待遇面の不満足感の特徴的であるといえるが、彼女らは、仕事の内容や労働条件からみて妥当な報酬ではない、他の職業に比べて低すぎる、食べていくのがやっとである、人間教育に携わる者でありながらあまりにも人間性を無視した扱いを受けているなどと訴えている。

第四の「職場環境」では、両群とも満足している方と満足していない方とが半々の結果となっている(図1—4)。

不満な点として多くあげられているのは人間関係で、園長の公私混同、独断的運営、親族のなれ合い経営、主任の自己中心的な考えなど上下関係がうまくいっていない点、また閉鎖的人間関係、マンネリ化した封建的ふんいき、チームワークがとれない、心を許し合った話合いができないなど、同僚間の問題や

職場の全体的ふんいきについての問題点が多く指摘されている。少数ではあるが、設備が整っていない、園舎が古くてきたない、騒音がひどい、教材が十分でないなど物的環境の問題についての不満な点もあげられている。

以上、四領域について二群間の比較をしたのであるが、群ごとの領域間比較をしてみると、満足している方の率の高さは、幼稚園教諭では勤務状態、職場環境、職務内容、待遇の順で低くなり、保育所保母では待遇、勤務状態、職場環境、職務内容の順で低くなっている。

これらの結果から、就職してまもない時点での満足度はあまり高くなく、したがって職場適応も良好であるとはいえない状態にあることが明らかになった。とくに、幼稚園教諭の待遇面での不満が目立っている。

四 職場適応尺度

保育者の職場適応をとらえる第二の方法としては、尺度を用いて測定し、得点化する方法を採用してみた。

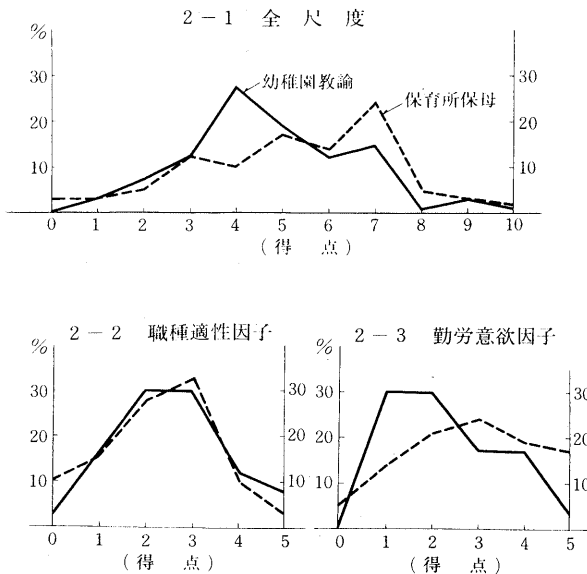
この尺度は「簡易職場適応尺度」と名づけているものである。保育者の職場適応を測定するのに適当な標準化された尺度をみいだすことができなかったため、藤原喜悅氏の試案などを参考に作成したものである。逐年的研究において調査項目の一

つとして位置づける程度にとどめたかったので、項目数を少なくし、回答方法も簡単なものにした。保育者自身による主観的側面から職場適応度を測定するこの尺度は、職種適性因子五項目、勤勞意欲因子五項目で構成されている。

「簡易職場適応尺度」は次の一〇項目からなる。

- イ、現在の仕事に興味をもっている
 - ロ、性格は現在の仕事に向いている
 - ハ、現在の仕事に必要な能力はある
 - ニ、現在の仕事をうまくやっていると自信はある
 - ホ、現在の仕事に必要な体力があり、健康である
 - ヘ、現在の給料で一応満足している
 - ト、職場では楽しい生活をおくっている
 - チ、職場のなかで、自分の存在は認められている
 - リ、現在の職場で、将来、経済的安定は得られる
 - ヌ、現在の仕事をやりがいのあるものだと思う
- これらの十項目を並べ、現在の自分にあてはまると思われるものに○印をつける方法で実施した。○印一つを一点として採点した。
- 全尺度及び下位尺度の得点分布は図2に示す通りである。また、各尺度の平均得点は表2に示す通りである。尺度値は得点の高い者ほど良い適応状態にあることを意味する。

図2 簡易職場適応尺度の得点分布



全尺度についてみると、保育所保育母の方が高い得点分布となっているが、統計的に有意な差とはなっていない。この結果からは、保育所保育母の方が幼稚園教諭よりも適応状態がやや良好であるといえる。

この尺度は二つの因子からなっているので、各群の因子構成を調べてみると、職種適性因子では幼稚園教諭の方がやや高い平均得点となっているが、有意な差ではない。勤勞意欲因子で

表2 簡易職場適応尺度の平均得点

尺 度	幼稚園教諭 (N=69)	保育所保母 (N=58)	有意性
全 尺 度	4.80 (1.90)	5.19 (2.23)	
職種適性因子	2.52 (1.20)	2.28 (1.23)	
勤労意欲因子	2.28 (1.18)	2.91 (1.47)	P < .01

() 内は標準偏差

は、保育所保母が高く、一%水準で有意な差となっている。この結果から、幼稚園教諭は現在の仕事で自分に適していると思っっている点で保育所保母よりもやや適応的であるといえるが、勤労意欲があるという点では保育所保母の方がずっと適応的であるといえる。

因子ごとに見られた差はおもにどの項目の差からくるものか、を次に検討してみる。

イ〜ホの職種適性因子項目の比較では、両群の間に有意差の認められた項目はなく、ほとんど差がないとい得るが、仕事に必要な体力、健康、仕事に対する興味の項目で幼稚園教諭の肯定率がやや高くなっている点があげられる。(表3)

へ〜ヌの勤労意欲因子項目では、仕事にやりがいを感じる点

表3 簡易職場適応尺度の項目別肯定率

項 目	幼稚園教諭 (N=69)	保育所保母 (N=58)	有意性
職 種 適 性 因 子	イ	84.1%	
	ロ	53.6	
	ハ	17.4	
	ニ	29.0	
	ホ	68.1	
勤 労 意 欲 因 子	へ	24.6	P < .05
	ト	49.3	
	チ	56.5	P < .001
	リ	5.8	
	ヌ	91.3	

で幼稚園教諭の肯定率がやや高い以外は保育所保母の方が高く、現在の給料に対する満足、将来の経済的安定の二項目では特に差が大きく、統計的に有意な差となっている。(表3) 幼稚園教諭が保育所保母に比べて勤労意欲が低いのは、給料に不満をもち、将来も経済的安定が得られないと思っるところに主な原因がある。

五 給料

職場に対する満足度、職場適応尺度を検討した結果、幼稚園教諭では待遇の面で深い不満があり、このことが彼女らをして勤労意欲を失わせ、不適応に陥らせがちであることが明らかにになった。では、幼稚園教諭は給料をいくら支給されているのであろうか。この点を次に調べてみよう。

図3に両群の給料（本俸）の分布を示した。幼稚園教諭では、

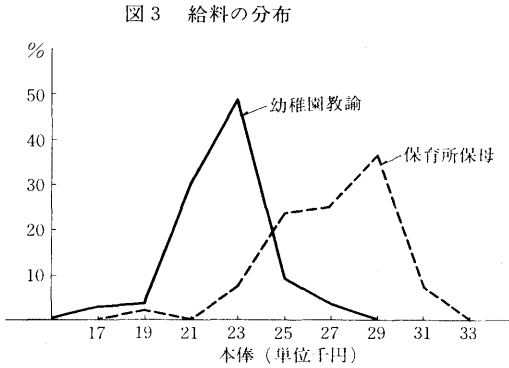


表4 給料 (平均)

給料	幼稚園教諭	保育所保母
本俸	21,996円	26,974円
手当	480	578
本俸+手当	22,476	27,552

二万二〜三千円を中心に最低一万七千円から最高三万一千円までの分布となっている。保育所保母では、二万七千円を中心とした分布曲線を描き、幼稚園教諭との差異がはっきりあらわれている。

これを平均値でみると、幼稚園教諭が約二万二千円で、保育所保母は約二万七千円となり、その差は五千円になる。(表4) 通勤手当を除く定額支給の手当は、両群とも七〇%の者は全く支給されておらず、支給額を全体で平均すると表4に示したように五百円前後となる。最低は五百円で、最低は七千円となっている。本俸は低く押え、ボーナスの起算に組み込まれない手当は高くし、月々の手取り額はある程度の金額になるような支給の仕方をとっている幼稚園も若干ある。

幼稚園教諭の給与は、保育所保母との間に大きな差があるばかりでなく、一般の中学卒の初任給とほとんど差がないのであるから、強い不満をもち、勤労意欲を失うようになるのは当然のようにも思われる。

六 今後の職業生活

最後に、こうした適応状態にある初任保育者が今後の職業生活をどうおくるかとしているか、という点について調べた結果を紹介しておくたい。

「あなたは現在の仕事を続けることについてどう考えていますか」と質問し、今後の職業生活に対する希望を調べたところ、表5に示すような結果になった。

就職後約三ヶ月を経過した時点で、このように多くの転職・退職希望者が出ていることはきわめて残念なことである。

人が労働において満たしたいと求めるおもなものは、満足な

表5 今後の職業生活の希望

希 望	幼稚園教諭 (N=70)	保育所保母 (N=59)
現在の職場で続けて勤務したい	64.3%	55.9%
転職したい	同一職種で	21.4
	類似職業へ	5.7
	異種職業へ	1.4
退職したい・その他・不明	7.1	8.5

人間関係、気持のよい条件下で満足して行なえる活動、および保証された生計であるといわれているが、最も強調された転職・退職の理由は、幼稚園教諭では、承知の上で勤めたものの、自分の働きに対する報酬としては現在の給料はあまりにもみじめだというものであり、保育所保母では、多い雑用、過重な労働、不規則な勤務から保育の専門家としての充実感を味わうことができないというものである。

七 おわりに

以上大ざっぱではあるが、養成校卒業者の就職後まもない時点での職場適応について述べた。これまでの諸調査から想像されたように、保育者自身の主観的側面からの適応は、あまりよい状態にはないことが明らかにされた。そして、ほとんどが私立勤務者である幼稚園教諭においては、やはり待遇面の問題が不適応に陥らせるおもな原因となっていることが確認された。はじめにも述べたように、この調査は保育者の適応過程の検討の一環として実施したものであるが、われわれは、この初期職場適応状態がこの後の保育者としての職業生活にどう影響し、どう変化していくのか、今後追跡していきたいと思う。

この一連の研究によって得られる資料が、保育者をめぐる諸問題の解決・改善に少しでも役立つならばさいわいである。